

西田幾多郎の芸術思想	1
同朋和敬 について	2
ブツダ最後の旅	3
親鸞の生死観	4

同朋大学 “いのちの教育” センター  
〒453-8540 名古屋市中村区稲葉地町7-1  
TEL 052-411-1373  
Eメール宛先 inochi@doho.ac.jp



● 同朋大学 “いのちの教育” センターだより

2015年度も、前年度にひきつづき、「いのちの教育」をテーマに連続講座を開催いたしました。第1回は佐藤誠「西田幾多郎の芸術思想」、第2回は安藤弥「同朋和敬」について、第3回はゲストスピーカーとして(公社)大谷保育協会理事長でもあり、長良保育園で園長をつとめておられる脇淵徹映氏をお招きして「子どもたちの育ちに学ぼう」、第4回は玉井威「ブツダ最後の旅」、最終回は小島恵昭「親鸞の生死観」といった内容で開催いたしました。以上、全5回の講座のうち、今号では本学教員が担当した4つの講座の要旨を紹介いたします。

2016.3.31 NO.43

西田幾多郎の芸術思想 佐藤 誠

西田幾多郎は、フィードラーの著作に触発されて、独自の芸術思想を展開している。その場合、西田は、創造的なエネルギーを芸術活動の根源と見なしたフィードラーの発想から、実在の働きを力動的な生成作用から捉える見解を見出すことになる。実際、西田によれば、美の概念は静態的な性質によって捉えられるのではなく、力動的な創造力を備え、芸術の世界は能動的に創作することによって定義されるのである。すなわち、芸術は、単に自然を模倣することによって創造されるのではなく、芸術家独自の力動的なエネルギーに依拠しながら、自由な生命力を表現することになる。そうした芸術表現は、単に芸術家の個人的な世界に留まるのではなく、普遍的な生命力をも提示するのである。西田は、こうして、美と善の類似関係を認める

ことにより、芸術のあり方が、真正の自己を追求している彼の哲学的な課題と密接な関係を示すことになる。

したがって、芸術の力動的な創造作用は、自己という真実在を捉える思索態度に有効な手掛かりを示唆していると考えられる。『善の研究』の中で、西田は、善を「自己の発展完成」であると述べる時、静態的な行動様式ではなく、芸術の創造作用のような生命力に満ちた力動的な働きを重視するのである。善の働きは、こうして、現実的な条件を超えて、普遍的な道徳的な価値を伴いながら、発展していくことになる。西田哲学の躍動した性質は、そうした力動的な発展によって特徴付けられると言えよう。

(本学文学部人文学科 教授)

親鸞の生死観

小島 恵昭

親鸞の生死観を手紙(「消息」)によって示したい。親鸞は「この身は、いまは、ときはまりてさふらえば、さだめてさきだちて往生しさふらはんずれば、浄土にてかならずまぢまひらせさふらふべし。」(『末燈鈔』)と、自分は年老いているので、必ず皆に先立って往生するであろうと言っている。

しかし親鸞は長命を保ち、先に同朋が往生したとき「明法御坊の往生のことおどろきまうすべきにはあらねども、かへすがえすうれしく候ふ。」とあり、その後、「ひらつかの入道殿の御往生のこときき候ふこそ、かへすがへす申すにかきりなくおほへ候へ。めでたさ申しつくすべくも候はず。」(『親鸞聖人御消息集(広本)』)と記す。

明法坊(『親鸞伝絵』の山伏弁円)や平塚の入道が往生されたことを、「うれしい」「めでたい」と述べているのです。ここで親鸞が「往生」と言っているのは、一般に「死ぬ」「亡くなる」ということを指

しています。親鸞の「往生」は、それは単に「亡くなった」と言っているわけではありません。「往生」は「往生浄土」の省略形です。この世における命を終え、この世の別れをしなければなりませんし、もうこの世で会うことはできません。それは悲しいし、つらいことです。なのに親鸞はこの世の悲しみつらさを問題にしていません。明法坊も平塚の入道も、この世の命を終えられたけど、仏の世界である浄土に往生されたのだから、めでたいことと慶んでいるのです。

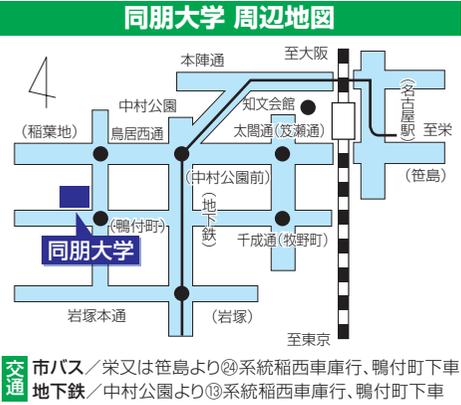
親鸞の浄土往生の在り方は「まづ善信(親鸞)が身には、臨終の善悪をば申さず。信心決定のひとは、疑いなければ正定聚に住することにて候ふなり。」(『親鸞聖人御消息集』(広本))と、臨終の在り方を気にすることなく死に方を全く問題にしない親鸞独自の浄土教の立場を明確に示している。

(本学人間福祉研究科 教授/「いのちの教育」センター 主幹)

同朋大学 “いのちの教育” センター 講座  
5/17(木) 17:00 ~ 18:30 連続いのちの講座  
親鸞聖人の人間観 講師 太田 清史 (次期学長)

- 所 員
- センター主幹: 小島 恵昭 (人間福祉研究科 教授)
  - 所 員: 田代 俊孝 (文学研究科 教授)
  - 所 員: 佐藤 誠 (文学部 教授)
  - 所 員: 木野美恵子 (社会福祉学部 教授)
  - 所 員: 平野 仁美 (社会福祉学部 専任講師)

お問い合わせ先  
同朋大学 “いのちの教育” センター  
〒453-8540 名古屋市中村区稲葉地町7-1  
☎ 052-411-1373



# ブッダ(釈尊)最後の旅

玉井 威

老年期(人生)における最大の課題は、自らの死をどう受容するかという一事に尽きる。とりわけ超高齢社会を迎え、地域の支えが希薄化した現代では、きわめて今日的な課題であろう。原始仏教経典の一つである『大パリニッバーナ経(大般涅槃経)』はこの課題に応えうるものとする。この経典は、インド・マガダ国の都『王舎城』から、おそらくはブッダの生まれ故郷『カピラ城』に向う旅の途上、クシナーラーにおいて入滅するまでの旅の過程、すなわちブッダ最期のステージを記録したもので、終末期のケア、死の受容、残される者へのグリーフケア、死後処置などが語られており、これらの諸問題に十分に応えうる仏教の知恵や方法が示唆されていると考える。

たとえばブッダ入滅の場面を取り上げてみよう。旅を続けてきたブッダは、クシナーラーの地でついに死を迎えることになるが、死の床に待てる修行僧たちに最後の説法を行う。

さあ修行僧たちよ、汝らに告げよう。もろもろの事象(諸行)は滅び行くものである。怠ることなく精進努力しなさい。

これがブッダ最後の言葉であった。このように、たとえ覚った人であっても生まれたも

の(作られたもの)はいつかは滅び行くものであるということ、ブッダ自らをその具体例として示すことで、人間は時間的存在(無常的存在)であること、いのちには限りがあること、それゆえに、人は仏に成ること(人格の完成)を目指して精進努力することを説示したのである。人は、死に際しても、たとえ言葉を失っても、意識を失っても、そこには大事な役割、価値、意味があることを、死に赴く姿を通じて示したのである。大事なデスエデュケーションをなすうることを示したと言えよう。行為的存在(業的存在)である人間は、終末期に至れば、さまざまな身体機能が失われ、生の無価値観、無意味感にとらわれがちであるが、すべてが失われても、人間にはなお大切な価値、意味、役割があるということが、このブッダ最期の場面から学ぶことができよう。

仏教の要諦は、ブッダ最期の言葉に示されたように、精進努力して仏になること(人格の完成をめざすこと)にあり、そうであるならば、死は「終末」ではなくて「完成」と見るべきだろう。死は、生の全うであり、大いなる成熟、完成と理解すべきであり、単なる人生の終末、敗北としては理解すべきではないだろう。

(本学 人間福祉研究科 特任教授)

# 『同朋和敬』について

安藤 弥

“いのちの教育”センターは1994(平成6)年に同朋大学の建学の理念「同朋和敬」の精神に基づき、人間のいのちを問い、その尊厳について研究し、またその成果を広く社会に、またその成果を広く社会に、また地域に啓発するために開設された。本講座ではあらためてセンター設立の理念とその淵源、その実践について考えた。

まず、「同朋和敬」についてその語源となる親鸞と聖徳太子の言葉について確かめた。それは「共なるいのちを生きる」とも言い表し、浄土真宗・仏教の精神のもと、いただいた「いのち」の平等・尊厳の地平に立ち、互いを敬い(異なりを認める)、和し、真の平等たる人間関係(同朋)において、ともに学び、生きていく場、を実現していくことである。この理念に基づく真の人間を養成するのが本学の建学理念=教育理念である。そして、その理念に基づく同朋大学の歴史について、年表をたどりながら略述した。

次に、蓮如御文における「御同朋御同行」、そして親鸞消息における「同朋」表現について確かめ、『御伝鈔』山伏済度段から、山伏弁円と親鸞の出会い、山伏弁円の葛藤と回心の描かれ方を見た。親鸞を害そうとした山伏が回心し、明法房となり親鸞のかけがえのない法友となっていくことの意味を深く考える必要があると指摘した。

そうした親鸞と山伏の関係に学びながら、自らが「共なるいのちを生きる」存在であることを感じ(自己認識)、他者も「共なるいのちを生きる」存在であり、同じ世界を生きる者であるという理解の共有・社会的発信(社会関係)をしていくことの大切さを確かめた。人間として生きようとする時、さまざまな課題があるなかで、浄土真宗に基づく「同朋和敬」の世界、いのちの教育の世界がある。センターはそのことを確かめ続ける大切な“場”である。

(本学 文学部仏教学科 准教授)